



月刊宮司プレス第二百二十号

彦島八幡宮 宮司ニユース
発行者 彦島八幡宮
宮司 柴田 宜夫
発行 令和六年 九月三十日

◇宮司の柴田です。お待たせしました、「月刊宮司プレス」第二百二十号の発行です。さて、「暑さ寒さも彼岸まで」といわれますが、まさにそのような折節となりつつあります。朝明

けが遅くなり、涼やかな風が心地よい朝です。しかしながら、日中は、さながら真夏であります。「夏が終わり、少しだけ秋が来て、また夏が来た」という感じでしょうか。

◇古来、私共の御先祖様は、暦の「二至二分」を大切にしております。「二至二分」と

は、言うまでもなく、「春分の日」、「夏至」、「秋分の日」、「冬至」のことです。特に、二分で

ある、「春分の日」、「秋分の日」であります。昼と夜の長さが同じ日です。古の奉公人の

お休みは、「お盆」と「お正月」でしたが、この「二分」だけは、「日忌み」といって、特別に、

お休みが与えられたそうです。また、日の出から、日没まで、一日中歩き続けることを、「日のお伴」と称しまして、体に良いとされました。今風に申しますと、「セラピー」ともいえるべきものでしょうか。

◇わが国の夫婦の元祖は、伊邪那岐命と

伊邪那美命の二柱の神様です。御后である

伊邪那美命は、火の神をお産みになられた時に、

大火傷をされて、御崩御（亡くなられること）

され、黄泉の国へ行かれます。伊邪那岐命は、

嘆き悲しまれ、御后を追って黄泉の国へと向か

われます。御后は、「けっして、私のお姿を見

てはいけない」と、伊邪那岐命と約束をかわさ

れますが、とうとう、約束を破って、変わり果

てた御後の姿を御覧になってしまわれ、黄泉の国から追放されてしまいます。その黄泉の国から、命からがら逃げ帰られた、伊邪那岐命は、

「禊」をされます。左目を洗われた時にお

生まれになったのが、天照大御神、右目を洗わ

れた時にお生まれになったのが、月読命で、

それぞれ、昼と夜をつかさどることになられました。その昼と夜の長さが同じ、春分の日と

秋分の日、特別な御加護があると、御先祖様方

はお考えになられたのかもしれない。

◇御子である火の神のせいで、御後の命が奪わ

れてしまいます。伊邪那岐命は、御子を剣

で、殺めておしまいになりました。その時

に三柱の神様がお生まれになられ、その一柱の

神様が、「高麗の神」です。麗の字は、竜の

ことをあらわしていますので、高いところにある水源の神様といわれています。彦島老町に

鎮座する貴布祢神社の御祭神でもあります。

火から、相反する、水が生まれているわけで、

まさしく、これが、「むすひ」、「むすび」なのだと思えます。

貴布祢神社は、階段を約九十段登り、長州藩の孫藩にあたる清末藩毛利邸から移築された神門を潜り抜け、当時、実業団の相撲でにぎわった頃をしのばせる棧敷の跡を左手に見ながら、心臓破りの急な階段を二十段ほど登ったところに御鎮座されます。彦島唯一の川である、

黄紺川の水源を思わせるような木々におおわれています。その貴布祢神社の例祭は、秋分

の日に齋行されていまして、御父君である伊邪那岐命と御兄弟の皇祖神等のゆかりの日に齋行されていることとなります。したがいまし

て、秋分の日の過日の例祭は、「神社神道はつながりの宗教である」、特に、「神々とのつながり」を実感させられた祭典となりました。



◇これからの日本は、少子高齢化による人口減、労働者不足、経済の低成長等、拡大よりもむしろ、縮小、後退の道を歩むことになるでしょう。しかしながら、国土が狭い島国のが国で、「小さな場所で豊かに暮らす」ことが得意だったのが、我々の御先祖様です。これから生きていく力になるのではないのでしょうか。

◇神社神道は、現実の社会と普段の生活が、そのまま宗教の世界です。江戸時代の伊勢

神宮の神主さんである、度会延佳さんも、

「神道というは人々日用の間にあり」とおっしゃっています。日常生活の中で神意ある

ところを「わが心」（畏れ、感謝）として、祈りを捧げ神の御加護を願う、神を祭る、

祭祀中心の宗教でもあります。そして、運

命共同体としての「小さな場所で豊かに暮らす」ことの実践として、自らの生活規範と

敬虔な生活態度を心掛けて来られました。

まさしく、「理想的な行い」を生活の大目標とされてきたのです。これからも、「人々日用の間」にある、「畏れ」と「感謝」を忘

れず、「ちいさな場所で豊かに暮らす」という「理想的な行い」を心掛けたいものです。

◇九月の祭典行事報告
観月祭 *九月十五日



◆祖霊祭 *九月二十二日



◆貴布祢神社例祭

*九月二十二日～二十三日

◇九月宮司動静

◆下関市敬神婦人会茶話会出席

*九月二十五日

